

4. 「高大トランジションの達成を目指した入試・教育の設計と開発 -京工織のダビンチプログラム-

京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授
山本 以和子



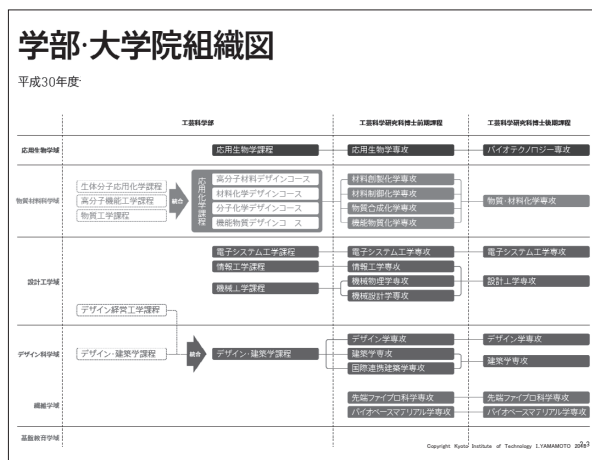
京都工芸繊維大学の山本でございます。名古屋大学にはまた本日もお世話になりますけれども、よろしく願い申し上げます。皆さまも、遠路はるばるお越しいただきましてありがとうございます。

ダビンチ入試は、実はダビンチプログラムの中の1つです。ダビンチ入試+ダビンチCRプログラムにつきまして、構築の背景をとともに話を少しさせていただこうと思っております。



本学は、京都工芸繊維大学という変わった名前の大学です。もともとは京都蚕業講習所と京都高等工芸学校の2つが新制大学のときに合体しまして、この2つのルーツの名前を取って京都工芸繊維大学と命名しています。学内外から、工芸繊維という長い名前であったりとか、繊維とい

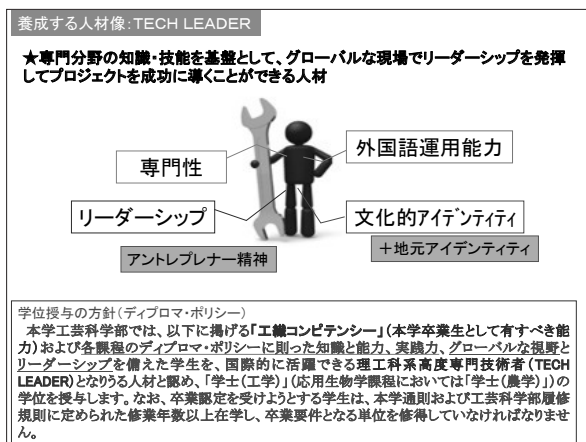
うのはもう古いのではないかと言われたりするのですが、われわれは大学のアイデンティティとして大事にしたいと思っております、この2つの名前を大事にしながら京都工芸繊維大学という名前にさせていただいております。



今、京都工芸繊維大学は、学部は1つしかございません。工学科学部と、大学院の博士前期課程と博士後期課程を持っております。その1つの学部なのですが、学域というものがございまして、学域が、応用生物、応用化学、設計工学、デザイン科学、基盤教育さらに大学院のほうだけあるのですが、繊維学域といったような形で構成されています。

その学域の中に課程がありまして、入試も、学域単位でやるときもあるのですが、課程単位で動いておりますし、教育、FDのほうもこの課程単位で動くケースが多いです。ですので、われわれはよく「課程、課程」と言います。応用生物学課程なので省略して応生とか呼びますが、今日は課程という言葉を上げるとは思います、そのときはこの組織図にある課程をイメージしていただければと思います。

物質材料科学域は、従来3課程あったのですが、こちらは今も1つになりまして、応用化学課程になりました。それから、設計工学域は3課程があります。電子システム、情報工学、機械工学ですね。デザイン・建築のほうは、従来2つあったデザイン・経営工学課程（従前は設計工学域に存在）と3年前に統合しまして、デザイン・建築学課程になりました。従来から2つあるのはなぜかとよく言われていたのですが、要は、デザイン・建築学課程のほうは昔の工学学部が起源、デザイン・経営工学課程は繊維学部が起源だったのですが、現代は両方の教育内容ともに重要なので、壁が取り払われました。

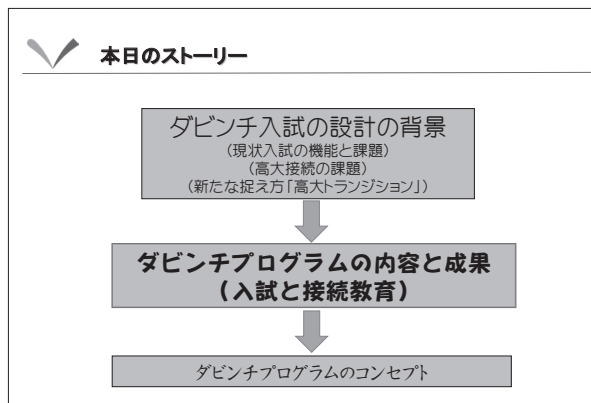


引き続きまして本学の教学ミッションです。養成する人材像のことをTECH LEADERと呼んでおります。

そのTECH LEADERの中身ですが、専門性、リーダーシップ、外国語の運用能力、そしてこれが京都ならではのところではないかと思うのですが、文化的アイデンティティ。これらの素養を持った人材を育てていきますとしています。

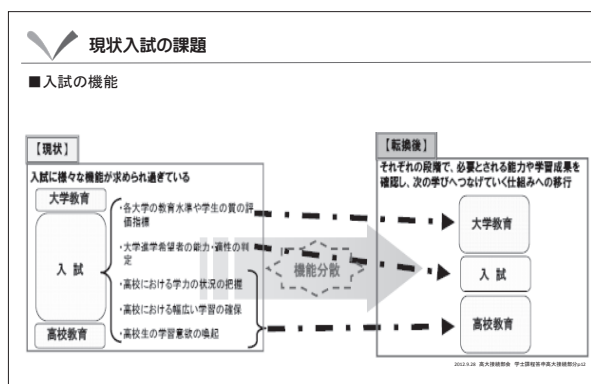
ちなみにアントレプレナー精神、+地元アイデンティティについてです。本学は地域創生の事業に採択されており、COC、COC+の事業を持っております。これは何かといいますと、京都府でいつも多少なりとも話題に出てくるのが、京都北部に対する経済・教育の支援関係です。京都市が京都の南部にございます。そこには大阪や奈良といった大都市圏が近くにあたりする関係で活性化しやすいところではあるのですが、京都北部は距離が遠く、なかなかそうはならない。その状況に対して京都北部にも大学の教学内容を持って行って活性化させる、地域活性につなげるという意味で、地域創生の事業を持っています。

福知山市というのは皆さんもご存じかと思いますが、大きな工業団地がありまして、そことインターンシップをしながら、その中で「地域創生Tech Program」という教育プログラムをつくっております。福知山にもキャンパスを造りまして、そこで、アントレプレナー精神や地元アイデンティティの要素を入れながら、さらにリーダーシップと実学の要素をかなりとり入れながら、プログラム展開をしています。



さて、今日のお話ですが、名古屋大学にせっかくお時間をいただいてこのような場を設けていただき、また高等教育の専門家の先生方もたくさんいらっしゃると思いますので、ダビンチ入試の設計の背景にある高大接続に重点を置いた形でお話をさせていただこうかと思っています。

ダビンチの中に脈々と息づいている、その背景を分かっただきますと、最後のダビンチプログラムのコンセプトというところもつながっていくのかなと思っておりまして、その流れで今日はお話をさせていただきます。

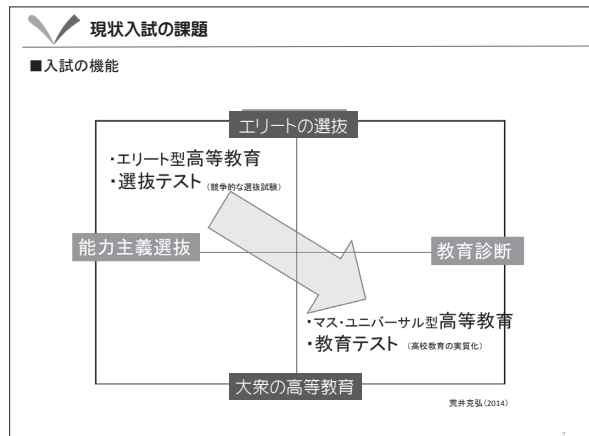


これはよくご存じのものだと思います。2012年の高大接続部会の資料として利用された学士課程答申の中にある問題提起です。ここにあるように現状の入試は非常に多くの機能を持たされ過ぎているのではないかという問題提起がなされました。

例えば入試ですと、「各大学の教育水準の学生の質の評価の指標」や「大学進学希望者の能力・適性の判定」が必要で、さらには「高校における学力の状況の把握」や「高校における幅広い学習の確保」といったことが入試の機能として存在しているとあります。

これを分解すると、大学教育・入試・高校教育の機能となるはずなのに、結局入試に全ての機能を任せてしまっているのではないかということが、このたびの入試改革の問題提起だったわけ

です。

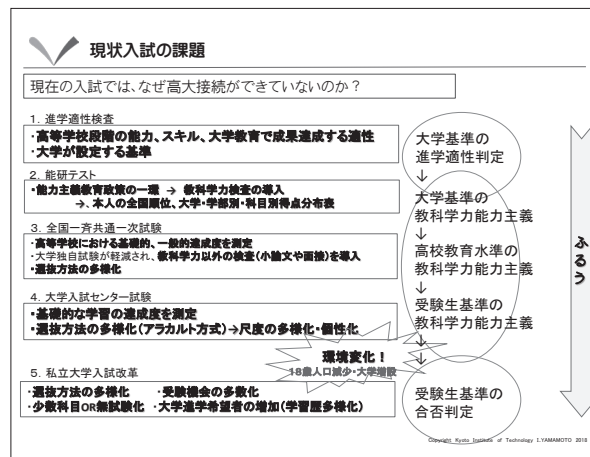


これは荒井先生が2014年に発表されたプレゼンを拝借しているのですが、例えば、昔はエリート型高等教育であって、能力主義選抜ができていました。しかし、今は、マス・ユニバーサル型の高等教育、すなわち大衆の高等教育へ移行したときに、テストが教育診断的な内容に変化するということが書かれています。教育診断というのは何かというと、ここに先生が書いてくださっているみたいに、高校教育の質が、結局、入試の中で判断機能として持たざるをえないようになってきていることを示しています。非常に的確に現状をお話しいただいている内容かなと思っています。

そうなってくると、では大学入試は、選抜テストなのか教育テストなのかというところですが、私的には現状では両方が考えられると思っています。

ただ、これが語られる前の中教審が課題とした入試のキーワードというのが、大学進学者の多様化、選抜機能が低下しているのではないかと、高校生・大学生の学習時間の減少、学習意欲が低下しているのではないかと、AO入試の不十分な学力把握が問題ではないかと、1点刻みが本当によいのか、大学入試センターの肥大化と実施体制面での課題みたいところがキーワードとして挙げられてきました。

要は、今、高校の教育水準と大学の学業水準がマッチングしていないということです。うまく合わさって段階のステップが踏めていないという状況を、結局これらの言葉を使って表しています。では、なぜ現代の入試は高大接続、移行ができていないのかということ、これまでの大学入試の変容をたどって、機能の変化を見てみたいと思います。



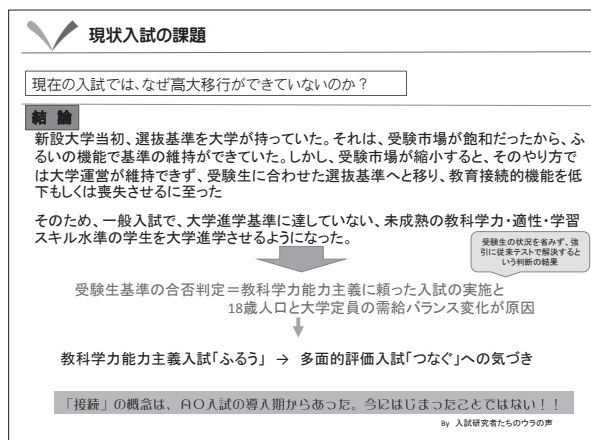
まず、新制大学後の大学の入学者選抜は、進学適性検査でした。この進学適性検査の時代は、接続の基準を大学が持っていたと考えられます。まだ、エリート型の高等教育でしたから。しかし、この進学適性検査は、対策が簡単な上、信頼性にも欠けるという課題がありました。なので、能研テストに移行したときに、能力主義教育政策がとられ、教科学力検査が導入されます。これが、教科学力による能力主義のはじまりです。能研テストは、高校や大学の反発からすぐ廃止になりますが、その後共通一次試験が始まるまで、長い間「大学基準の教科学力能力主義」に基づいた入試が展開されます。

しかし、難問・奇問や大学の序列化を生み出します。それを避けるために、共通一次試験では、高校教育水準の教科学力能力主義で入試が行われました。しかし、これもまた、5教科主義の一次試験のため、大学難易ランキングが簡単に判定され、大学の序列化につながりました。その結果、合格可能性だけを追求した「振り分け進路指導」が横行し、専攻学部とのミスマッチ現象が問題となりました。

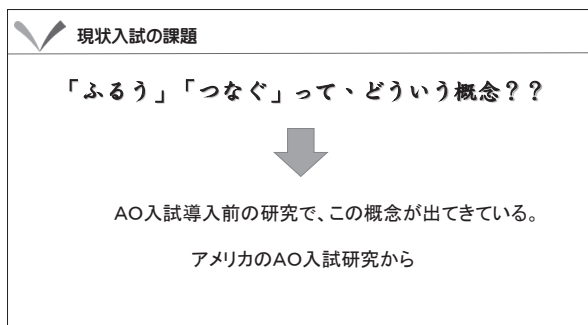
そこで、大学入試センター試験では、受験生基準の教科学力能力主義が取られます。しかし、1992年を最後に18歳人口は減少、さらに4年制大学増設という需給バランスが崩れ、私立大学においては、受験生基準の合否判定に、接続機能が変化しました。例えば、少数科目もしくは無試験化といった大学入試形態が出現しました。結局、大学での教育水準と高校の教育成果の質保証

の差がますます開く状態になっていたということが、現在の高大接続の主たる課題であると言えます。

要はこういうことです。なぜ高大移行ができないのか。受験生基準の合否判定、それから、教科学力能力主義に頼った入試の実施、そこに18歳人口と定員の需給バランスの変化が原因であると判断できます。

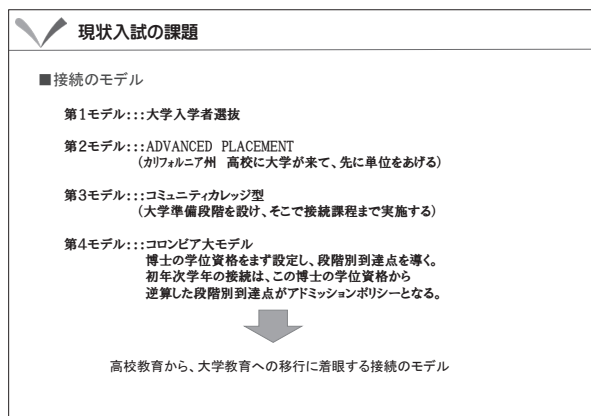


教科学力能力主義入試というのは、教科試験結果の1点刻みで削っていくわけですから、いわば「ふるう」ような機能だったわけです。それを多面的評価にしましょう、総合的にいろいろ見ていきましょうというのは、「ふるう」から「つなぎ」への気付きではなかったのかなと思うのです。接続に対して、「ふるうだけではなくてつないでいこうよ」という概念の捉え方が出てきたのが、実はAO入試の導入期ではなかったのかと私は思っています。



そういった研究は、90年代後半からたくさんなされました。ここにいらっしゃる夏目先生もそうですが、AO入試の接続の概念は、ふるうというより、つないでいくためにどういう入試開発をしなければいけないのかということ海外のあちこちの事例からベンチマークして日本型に持ってきました。なので、この「つなぐ」ということに関しては、今、盛んに高大接続答申の中で「つなぎ、つなぎ」みたいな話をしていられっしゃいますが、実は今に始まったことではないと

いうことを、まず押さえておく必要があると思っています。



さて、もう1つ考えたいのが、ではどうやってつないでいくのかのモデルです。一番上に大学入学者選抜と書いているのが、今現在皆さんがイメージされているようなふるいの機能の接続のモデルとします。

次に第2のモデル、アドバンスド・プレースメントです。高校に大学が来て先に単位をあげるというモデルです。現在、アメリカでも非常に広がってしまっていて、全米で約60%の高校でこのアドバンスド・プレースメントコースを開設し、216万人の高校生がこのテストを受験して、約8割の大学でそのスコアを合否査定に使っているということです。

第3のモデルは、コミュニティ・カレッジ型です。大学進学のための準備段階を設けて、そこで接続課程まで教育を実施する。高校を卒業して、進学先の大学群に附属するコミュニティ・カレッジがあって、そこで、リメディアル教育を行い、そのテストに合格すると大学に正式に進学できるといった接続の仕方です。



第4モデルは、コロンビア大モデルです。博士の学位資格をまず設定して、その下位の段階別到達点を導いていく。要は、博士のドクターポリシーから、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー、次はマスター学位のポリシー、カリキュラム、アドミッション、さらにディプロマポリシー・・・というようにした場合に、最終的なディプロマのアドミッションのポリシーとはどういうものかということで接続していこうというものです。高校教育から大学教育の移行に着眼する接続のモデルは、大きく4つのモデルに分かれるのではないかと考えています。

▽ 現状入試の課題

アメリカの大学入試の考え方

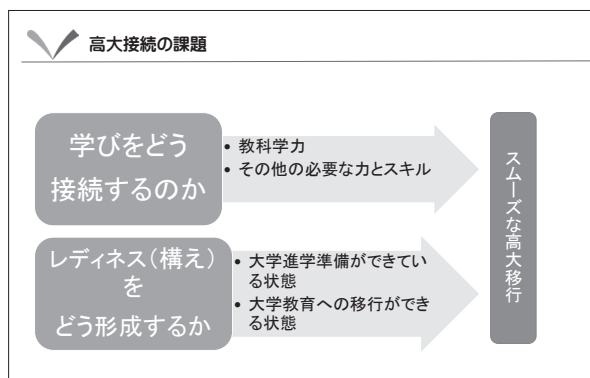
×ふるいにかける ○異質なものをつなげる

sieve

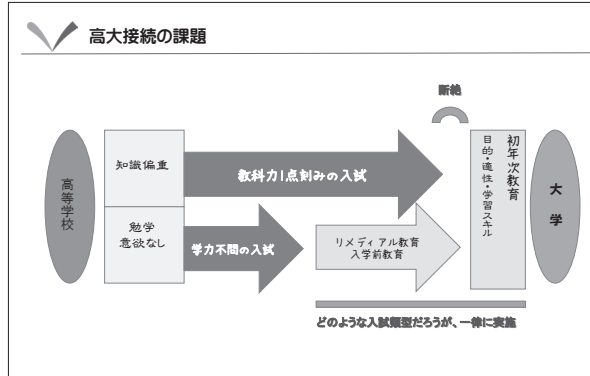



×Connection ○Articulation

これらから、アメリカの大学入試の考え方ですが、「ふるいにかける」というより、「異質なものをつなげる」感じがします。高大接続を英語で言うと、「Articulation」というのですが、まさしく「異質なものをつなげる」という意味なのです。この形で進めているのがアメリカの大学入試のやり方だと考えられます。



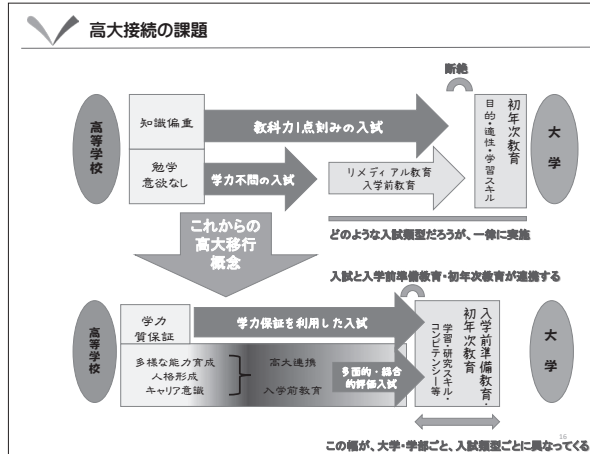
では、高大接続には、何が必要なのでしょう。一つは、学びをどう接続するのかということです。そしてもう一つが、レディネス(構え)をどう形成するかということです。これらを「高大接続の二本柱」と私はよく呼びます。「学び」のほうは、教科学力とその他、教科学力につながる必要な力とスキルをさします。いわゆるジェネリックスキルのなところもここに入ります。もう1つの「レディネス」は、大学の進学準備ができている状態、適性や人間性、学業姿勢など、大学教育への移行ができる状態を包括的に「レディネス」と言っています。



現在は、高等学校で知識偏重型の教育が行われており、1点刻みの入試が行われています。

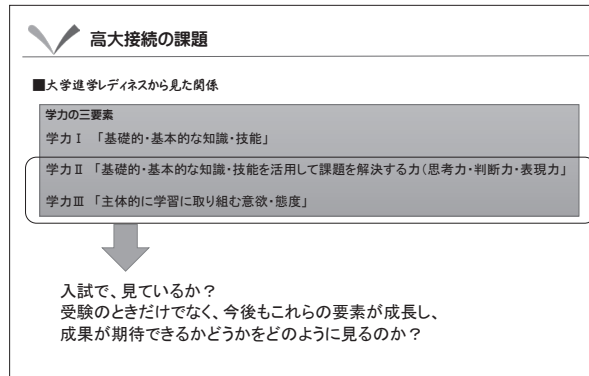
一方では、勉学の意欲がない生徒も、取りあえずみんなが大学に行くから行く、という感じで学力不問の入試を受験します。その合格者にはリメディアル教育や入学前教育を実施します。さらに、二つの入り口であっても、大学に入ってから、初年次教育で学習目的や学習スキルを教えます。どんな入試類型であろうが一律に実施しているというのが、現状の大学の姿です。

ましてや、濃い矢印にあたる入試とリメディアル教育や入学前教育、初年次教育は、大学の中でも部署が異なります。そうすると、入試結果の情報、合格者の入学前教育の情報、初年次教育での成果をなかなか共有化しづらい状況にあり、教育の成果があまり期待できません。

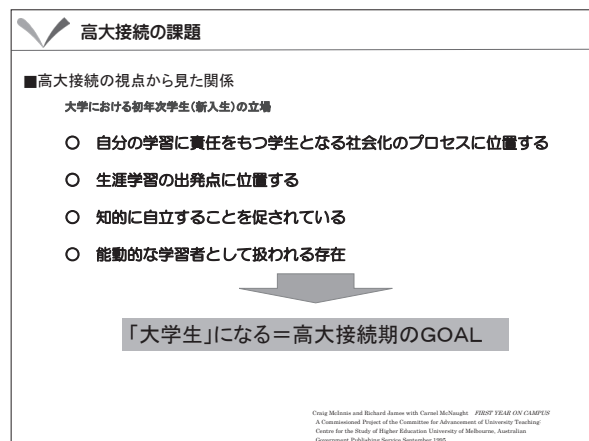


本来は、おそらく、基礎学力の質保証、多様な能力育成、人格形成、キャリア意識等があり、それを高大連携や入学前教育で実施するほうがいいのではないかと考えます。また、学力保証を利用した入試とAO入試のような多面的・総合的評価入試とは、入学前の準備教育、初年次教育は入試類型ごとに若干異なって実施しなければならないと考えます。なぜなら、入試で判定している視点が異なることにより、大学進学後の学業遂行にスムーズに移行できないかもしれないからです。そうなってくると、どの募集単位でどういう入試をしたのか。そして、大学の教育にどうつなげ

るのか、そのための教育開発を、入試と教育つなげて一緒に考える必要があるのではないかと思います。



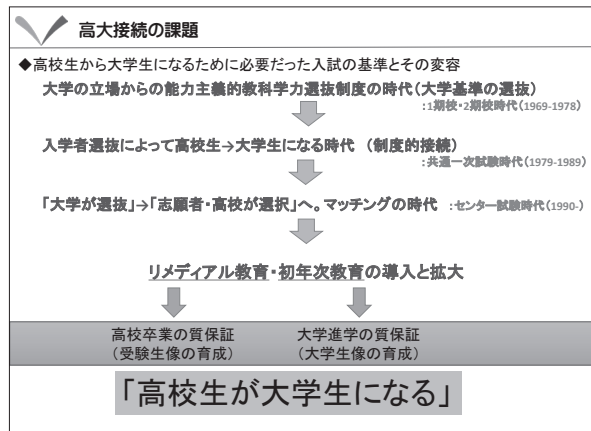
引き続き、進学レディネスから見た関係ですが、今、学力の3要素を考慮して入試開発、入試改革をしてくださいという流れがあります。基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決する力。「活用して課題を解決する力」です。今までは、「基礎的・基本的な知識・技能を問う力」を入試で判定していました。しかし、現在は、新たに活用して課題を解決していきましょう、主体的に学習に取り組む意欲・態度も含めて入試で判定しましょう。受験のときだけでなく、大学進学後もこれらの要素が成長し、学習活動の成果が期待できるかどうかをどのように見るのかということが、結局、今、大学側に課されている問題ではないかと思えます。



もう1点、念頭に入れておきたいのがこれです。メルボルン大学のリチャード・ジェームス先生の引用です。大学における初年次学生の立場を提示してくださっています。大学における新入生は、自分の学習に責任を持つ学生となる社会化のプロセスに位置しますよ、生涯学習の出発点に位置するのですよ、知的に自立することを促されているのですよ、能動的な学習者として扱われる存在なのですよとあります。

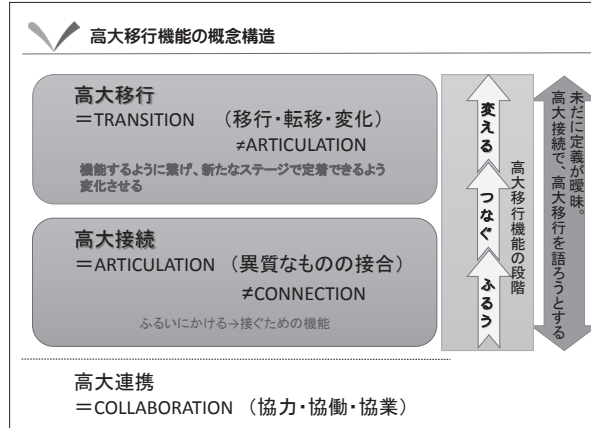
2000年代の中盤ぐらい、ちょうど教育指導要領が改訂し、そのカリキュラムを受けた新入生が

入学する2006年ぐらいから初年次教育が多く大学の導入されました。これは、そのときによく使われていた概念ですが、今でも大切なことだと思っています。要は、大学に入ってきて高等教育の1年目というのは、生涯学習者のスタート地点である。要はlifelong learner、もっと言えばactive learnerです。自分で自分の学びについて、また自分の課題について、自分で考え、その解決を自分で導き出す。そういった学びの姿勢に変わっていかなければいけない。それが大学生なのです。ということは、そういった大学生になるということが高大接続期のゴールではないかと考えています。



今、お話しした内容は、まとめるとこの形になります。高校生から大学生になるために必要だった入試の基準は、当初、大学の立場からの能力主義的教科学力選抜制度の時代であった。それが、制度的接続変わり、入学者選抜によって高校生が大学生になる時代となった。しかし、センター試験の時代では、大学が選抜というより志願者・高校が大学を選択、いわゆるマッチングの時代になっていった。その結果、教育課程をはじめ周辺状況の変化に伴い、発生したのがリメディアル教育と初年次教育でした。

では、この2つは大学での学業遂行の面から見ると何なのかというと、1つは、高校卒業の質保証を大学が抱え込んでやろうとしていたということです。これは、いわば受験生像の育成です。そして、初年次教育は、大学進学への質保証をしましょうということでやっています、こちらも、いわば大学生像の育成です。このような観点で見たときに考えられる戦略課題は、「高校生が大学生になる」ということではないかと考えたわけです。

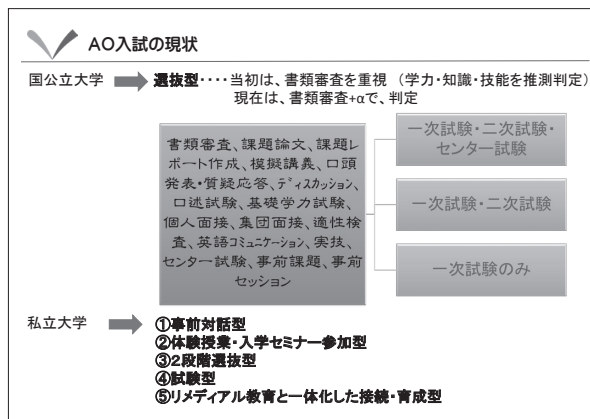


それらを考えたときに、はて、高大接続でいいのかと私は考えました。高大接続は、海外では「アーティキュレーション」という単語を使います。高大接続を勉強している人たちは幾度となく聞いている言葉ですが、これはもともと「異質なものの接合」という意味です。なので、コネクションとは言わないのです。コネクションは同質なものの接合ですから。異質なものの接合ということで、英語では「アーティキュレーション」という言葉を使っています。

しかし、高校生を大学生にするというのは、どちらかという「トランジション」ではないのか、「高大接続」ではなく、「高大移行」でしょう。このトランジションという意味は、機能するようにつなげて新たなステージで定着できるように変化させる、なのですが、そう考えると、もっと簡単な言葉で、「ふるう」でもなくて、「つなぐ」でもなくて、「変える」ではないかと思ったわけです。

この「ふるう」「つなぐ」「変える」が、高大移行機能ですね。ある大学の入試を見たときに、ここの入試はふるう機能を持っているな、ここのこの入試はつなぐまでやっているんだな、この入試は変えるまでやっているんだなと考えると、入試を高大移行機能で分類する際に分かりやすくなるのではないかと、この構造の説明をさせていただきました。

ここまでが高大移行機能の概念構造のお話でした。では、次にAO入試について考えたいと思います。



現在、AO入試は、このような形で実施されています。国立大学の場合は選抜型です。書類審査をはじめ様々な試験を実施しています。また、方法も、一次試験のみであったり、一次と二次試験を実施したり、一次、二次、センター試験までを実施したりしています。国立大学の場合は多くの大学でセンター試験まで課しています。そして、私立大学のAO入試は、ここにあるような型に分類できます。

AO入試の現状

課題1. 入学後の教育との関連を十分に踏まえたうえでの大学入学選抜
成果→アドミッションポリシー策定99.6%、リメディアル教育・初年次教育の体制・組織が出現、入学前教育の実施

課題2. 受験生の能力・適性等の多面的な判定（評価尺度の多元化の推進）
成果→評価視点の変化（アドミッション・ポリシーに基づいた選抜設計と総合的評価）、AO入試生（目的意識と教育のマッチング）は入学後の大学教育の満足度が他の入試生より高い

課題3. 受験機会の複数化（やり直しのきくシステムの構築）
成果→入試類型の増加に伴う受験機会の増加

課題4. 公平性についての考え方の見直し
成果→多面的・総合的評価、および評価尺度の多元化は、AO入試導入と同時に受け入れられた。しかし、産業界など一部において教科学力による能力主義に留まる声も聞かれる。

課題5. 大学における入学選抜の実施の見直し
成果→国立大学においてアドミッションセンターを設置し、AO入試を導入する大学が出現した

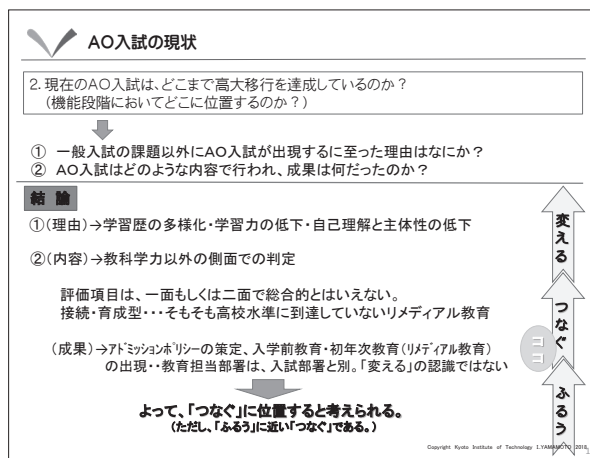
1-5は、出典：2000年大学審議会答申「大学入試改善について」より、AO入試の導入前までの入試課題。

ここには、AO入試導入までの入試の課題とその後の成果が書かれてあります。まず課題1、入学後の教育との関連を十分に踏まえた上で、大学入試制度、入学選抜が必要とあります。その後、成果としてアドミッションポリシーの策定状況、リメディアル教育や初年次教育の体制の出現や入学前教育の実施を例に挙げています。次に、受験生の能力・適性の多面的な判定、評価尺度の多元化の必要性に対しては、AO入試を大学が導入しました。2000年初頭の話です。

さらに、受験機会の複数化、やり直しの利くシステムを構築するために、入試類型を拡大し、受験機会を増加させました。公平性についての考え方の見直しも課題として挙げています。多面的・総合的評価、および評価尺度の多元化はAO入試の導入と同時に受け入れられたのですが、

教科学力能力主義にとどまる声も聞こえています。現在もそうです。

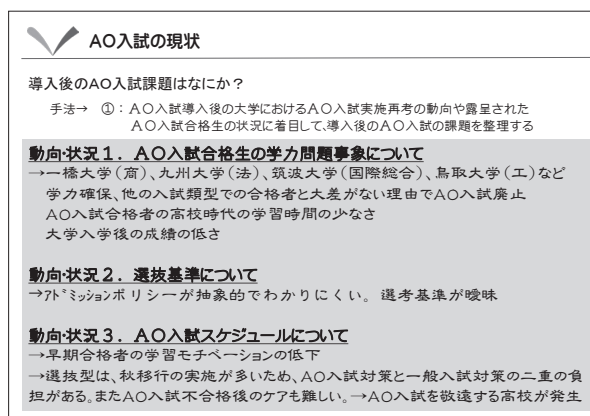
それから、大学における入学者選抜実施の見直しに対して、アドミッションセンターを設置してAO入試を導入する大学が出現したといったような成果が出ました。



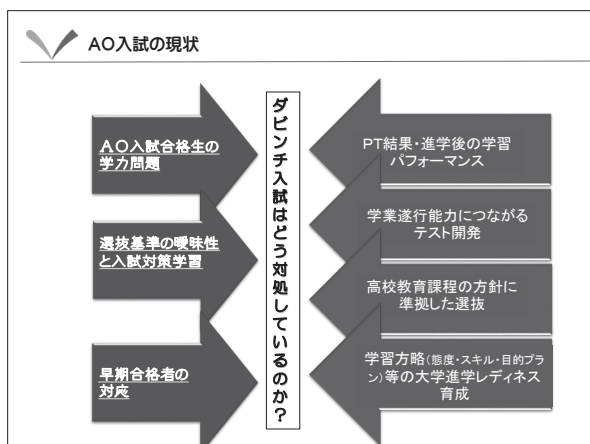
その課題と成果から、10年余り経過していますが、現在のAO入試はどこまで高大移行を達成できているのかを考えました、手法は、先ほどの概念構造を利用しています。

まず、大学進学前の生徒の学習歴が多様化したり、学習力が低下したり、自己理解と主体性が低下したり、というような状況が発生しました。AO入試には、教科学力以外の面を判定することがあったのですが、その評価項目は、一面もしくは二面で、総合的とは言えないではないか。また、そもそも高校の卒業水準に学力が到達していないところからリメディアル教育が発生している状況が覗えました。

AO入試の成果としては、アドミッションポリシーの策定、入学前教育・初年次教育の出現があるが、教育の担当部署は入試と別である状況において、日本のAO入試は、まだ「変える」という概念に到達しておらず、「つなぐ」のところにとどまっている状況だと考えられます。



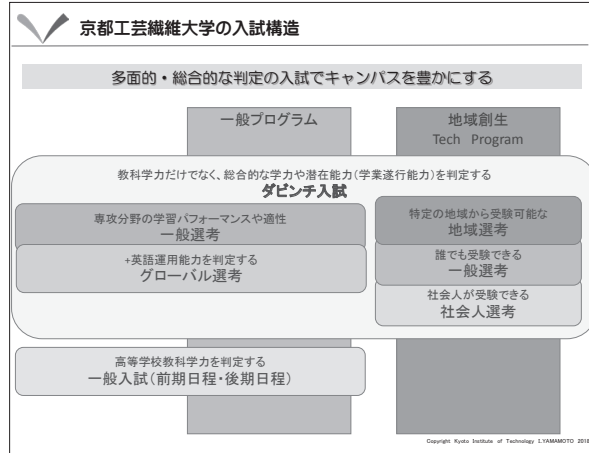
そして、導入された後のAO入試の課題です。まず、AO入試合格者の学力問題が挙がりました。その学力問題が影響して、AO入試を撤退する国立大学も出現しました。次に、高校側から選抜基準が非常に分かりづらいと言われます。だから、指導しづらいという声があります。さらに、AO入試のスケジュールについても課題に挙がります。早期合格者の学習モチベーションが低下してしまうらしく、そうなると、他のクラスメイトにも影響が出る、その合格者自身にも良くないから、AO入試を敬遠する高校が発生しているといった状況が課題として出ています。



それに対してですが、本学のダビンチ入試がどう解決しているのかという話をしたいと思います。



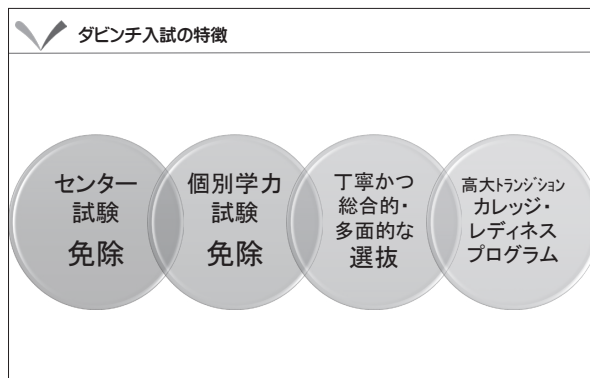
ダビンチ入試のサイトは、大学のホームページから入学者選抜のほうに入ってくださいと、ダビンチ入試につながります。また興味がある方はご覧いただければと思います。



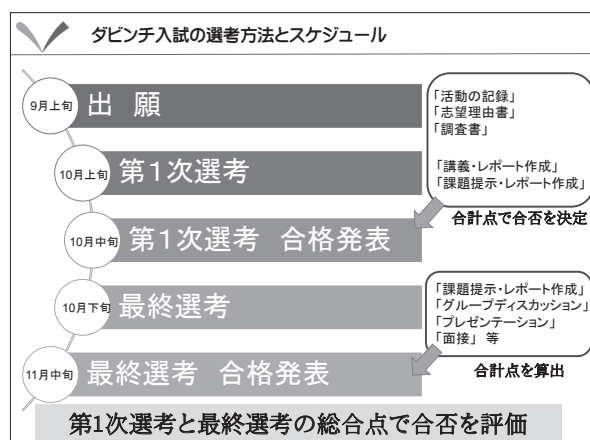
入試構造を簡単にお話しさせていただきます。本学は、従来から行われている一般プログラムと地域創生Tech Programという、2つの教育プログラムを持っています。地域創生Tech Program生（Tech生）は、3年生前期まで松ヶ崎キャンパスで過ごし、3年生後期から福知山キャンパスに移動します。それまでは松ヶ崎で一般プログラム生と一緒に勉強するのですが、福知山キャンパスに移動して、そこにある工業団地とインターンシッププログラムがあり、実学寄りの教育展開をしています。

本学は、学部生の受け入れは、主にダビンチ入試とセンター試験を受けて個別入試を受ける一般入試です。推薦入試はありません。そのダビンチ入試は、一般プログラムでは2つの選考を行っています。ダビンチ入試の一般選考とグローバル選考です。ダビンチ入試は第一次選考と最終選考で構成していますが、グローバル選考の場合、最終選考の午後に英語のスピーキングとヒヤリングの能力を測る選考をしています。第一次選考と最終選考の午前は、一般選考と同じ試験を受験します。この栄吾のスピーキングとヒヤリングは、本学が開発した全国初のC B Tテストシステムを利用しています。ここでは、英語によるタスク達成能力を測っています。

もう1つの地域創生Tech Programは、先ほど同様、最終選考の午後にこのプログラム独自の選考をしています。募集単位は、3種類あり、地域選考は、京都北部に限られた高校出身者が出願できます。社会人は、社会人のみに門戸が開かれています。その他の受験生は、一般選考の枠を出願することができます。また、地域創生Tech Programの学生は、一般入試で募集を行っておりません。



ダビンチ入試は、国立大学には珍しく、センター試験免除、個別学力試験免除しています。そして、丁寧かつ総合的・多面的な選抜、そして、高大トランジションのカレッジ・レディネスプログラムを持っているのが、特徴になります。



ダビンチ入試は、出願、第一次選考、第一次選考の合格発表、それから最終選考をして、最終選考の合格発表という流れで実施します。

第一次選考は、出願時に提出する活動の記録、志望理由書、調査書、そして、来学して受験いただく講義レポート、課題提示・レポート作成で評価をします。

最終選考では、課程ごとに内容が異なるのですが、課題提示・レポート作成、グループディスカッションなどを受けていただいて、最終的に第一次選考と最終選考の総合点で評価しています。

ダビンチ入試の資質・能力の評価

書類選考

**高校での学習活動より成長潜在力を見る
自己理解を促し主体的学習者の学習観の醸成**

高校の調査書	活動の記録	志望理由書
<p>どのような高校生活を 送ってきたかを 教育者の視点で見る</p>	<p>これまで自分が取り組んできたことを分析的に考察する=自己理解</p>	<p>大学での学修の意義や背景・目的・計画を構築する =主体的学習者</p>

出願時に提出していただく書類は、活動の記録と志望理由書、調査書です。本学の場合、活動の記録や志望理由書を使って、自己理解を促し、さらに主体的学習者の学習観を醸成していただき、その観点で評価しています。

活動の記録は、これまで自分が取り組んできたことを分析的に考察する、要は自己理解を促すような内容を書いていただきます。

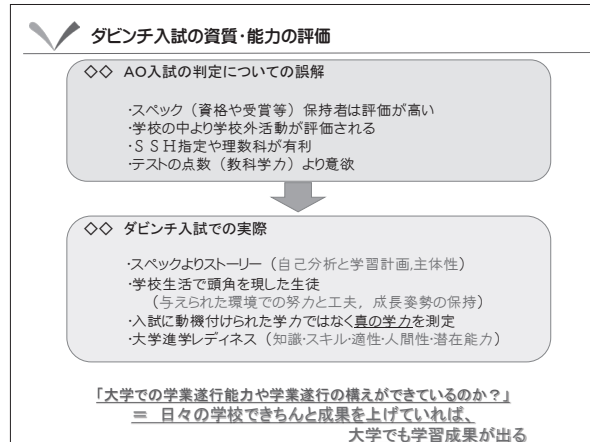
志望理由書は、大学での学習の意義や背景、目的、計画を構築していただき、主体的学習者かどうかをここで見させていただいています。

その中で、よく勘違いされるのが活動の記録です。

活動の記録の書き方					配布無し
区分	⑧名称欄	⑨内容欄	⑩実績年月※	⑪主体機関	⑫参加対象 一般対象の場合は「-」 を記入してください
活動	活動名 (例：学生会活動、クラブ活動等)	役割 (例：会計係、調査班班長、部長、委員長等)	活動期間	活動の主催機関名 (校内の場合は学校名)	活動資格がある対象 (例：高校生、15歳以上、18歳未満等)
発表	発表の場の名称	報告書・作品等の概略説明 (共同の場合はその旨も明記)	発表した年月	発表の場の主催機関名	参加資格がある対象 (例：高校生、15歳以上、23歳未満等)
資格	取得した称号	資格や受賞だけではありません。			各がある対象 学生、15歳以上、18歳未満等)
受賞表彰	受賞した称号 または 表彰の名称	自分なりに頑張ったことを 思い切りアピールして下さい。			しくは表彰 5対象 学生、15歳以上、18歳未満等)
記事掲載	掲載された新聞・雑誌・冊子等の名称	掲載記事の見出しやタイトル	掲載された年月	発行機関名	新聞・雑誌・冊子の 主な読者 (例：高校生、15歳以上、23歳未満等)
その他	上記を参考に名称がある場合はその名称を記入し、ない場合は内容のから名称を自分でつけてよい	上記を参考に内容やレベルがわかるように記入しなさい	上記を参考に実績年月を記入しなさい	上記を参考に主催機関名を記入しなさい	上記を参考に参加可能な対象者を記入しなさい
募集要項に記載してあります。					

活動の記録の片面には、実績表があります。中学生以上6年間での実績を、エビデンスがあれば記入していただけるようになっていきます。その書き方を募集要項に掲載していますが、これがないとみなさんバラバラに書いてくるのです。例えば、英検とGTECを混合していたりします。なので、こちらが拝見して分かるように書いていただきたいので、この記入ルールを掲載しています。

しかし、そうすると、このような内容がないと合格できないと勘違いする人が多いのも事実です。ですので、そうではないですという話をします。資格や受賞だけではない、自分なりに頑張ったことを思い切りアピールしてください。ですので、このエビデンスが特になくとも合格している人がいることを伝えています。



それはこういう考えがあります。AO入試判定については誤解があります。例えば、スペック、つまり資格や受賞の保持者は評価が高いと思われる。それから、学校の中より学校外の活動が評価されると思われる。学校の中というのは、活動が限定的になります。学校外だと、例えば留学やボランティア活動でもいいですし、習い事で選手になった、ピアノのコンクールで受賞したといった話もあります。

それから、例えばSSH指定校だったから、AO入試に有利だったとか、自分の出身は理数科だったのでダビンチ入試に有利だったというような誤解もあります。さらに、テストの点数より意欲だということも言う人も多いです。でも、実際は違います。われわれは、こういったスペックよりストーリーだと思っています。

分かりやすくいえば、こういうことです。例えば、仮にあなたがオリンピックで金メダルを取ったとしましょう。そうすると、「金メダルを取りました」と書いてきますよねと。でも、その横に活動の記録があります。この活動の記録の内容を読んだときに、「え？ これで金メダルを取ったの？」という内容では、高得点は難しいとお話をします。

要は、自分の成長のストーリーもっているかが大切です。金メダルを取るために、自分がどういう動機で、どういうことをやって、どういう発見があったのか、それによって自分はどこまで来ているのかということ进行分析してほしいのです。それが自己分析です。その活動の内容から、主体性、コンピテンシーなどを十分見ていきたいと思っています。

次に、学校の中より学校外活動が評価されるとか、SSHの指定とか、理数科が有利といった誤解ですが、これは、その子の実力ではないですね。周りが用意してくれた環境です。その環境の中でどれだけ頑張ったか。ですから、SSHの場合、特別な授業をたくさんやっていると思います。高大連携もたくさんやっていると思います。高大連携について書いてもらってもいいのですが、

では、その環境を使って自分はどうかだったのか、どういう努力をしたのか、どういう振り返りをして、さらにどういう工夫をしたのか、その成長のプロットと姿勢を見せてほしいと思います。

高校生なので、大人たちが与える環境の中で育っていくのですが、特殊な環境でない高校生も一方にはいます。環境の違いが、評価の違いになってはならないと考えています。

それから、テストの点数より意欲についてです。大学で学習活動をしていくには、知識も必要ですし、学習に関するスキルも必要です。適性も人間性も潜在能力も全て評価対象にします。です。教科学力だけでもないし、意欲だけでもないということです。われわれはこれらを大学進学レディネスという言葉を使っています。

このダビンチ入試では大学での学業遂行能力を測りますという言い方をしていますが、要は、大学の学業についてこられるかどうか。大学進学の構えができているのかを判定しています。です。大学の授業の内容そのままを入試でやって、そこに受験生に来ていただいて、実際に活動していただくといったテストになっています。


です。日々、高校できちんと授業を受けていたり主体的に授業に関わったりしていれば、ダビンチ入試は難しいものではなく、またそのような入試の開発を目指しています。

ダビンチ入試の資質・能力の評価


◆学業遂行能力につながるテスト開発
第一次ステージ：学域別

大学での学業遂行能力を見る＝体験入学型の試験

午前 講義→レポート作成



高校まで学んだ知識の中に
新たな知識を組み入れる



講義でメモを取った資料を
持込み、それを基にレポート
を作成する。

午後 課題→レポート作成

目的意識・意欲・必要な能力・
適性等を見る。

Copyright © 2018 "D.VINCI" Institute of Technology. All Rights Reserved.

その学業遂行能力をどのように測定しているかの実験がプレゼンにあります。左の写真のように、教員が受験生に講義をします。受験生には、講義レジュメを配布しているので、それを見ながら、またメモを取りながら講義を受けます。そして、レポート作成には、このレジュメを持ち込むことができます。ここでは、講義で得た新しい知識を理解し、それを高校まで学んだ知識の中に組み入れて応用することができるか、判定します。いわば、体験入学型の試験です。

講義・レポート作成の講義テーマ
「ヘモグロビンとミオグロビン」 酸素と結合するタンパク質-
講義資料: 計27枚 平成27年度 ダビンチ入試より

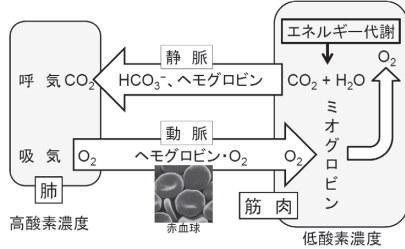
タンパク質とは



◇この試料は試験に持ち込むことができます。
◇講義中、この用紙にメモをとることは自由です。
(メモは採点の対象になりません)

講義資料より

ヘモグロビンとミオグロビンの働き



その内容ですが、これが実際の27年度ダビンチ入試の講義資料です。見ていただいたら分かる
とおり、ヘモグロビンとミオグロビン、酸素を結合するタンパク質。テーマからして高校の範疇
ではないということが分かっていただけたと思います。大学の授業をしています。

問1

問1. 以下の文章を読んで、設問(ア)～(ウ)に答えなさい。

(配点率 20%)

タンパク質はたくさんのアミノ酸が[A]結合でつながってできている。タンパク質中に含まれているアミノ酸は全部で[B]種類あり、それらがつながる数や並び順のの違いによって、多くの組み合わせが可能である。その結果、多様な立体的構造と機能をもちタンパク質をつくることができる。

アミノ酸の中央にある炭素原子には、水素原子、塩基性基である[C]、酸性基の[D]のほか、側鎖と呼ばれる置換基Rが結合している。この側鎖によって、アミノ酸の化学的性質が決まる。中央の炭素原子は、[E]以外のアミノ酸では不斉炭素原子なので、[E]異性体が存在する。また、側鎖にも不斉炭素原子があるアミノ酸として、[G]がある。

側鎖の化学的性質を疎水性と親水性で分類すると、[I]などは疎水性の側鎖を、[J]などは電荷のない親水性の側鎖を持っている。一方、pHが中性付近の水溶液中では、[K]や[L]などの側鎖は正電荷をもっているのに対して、[M]や[N]の側鎖は負電荷をもっている。

○水溶液中のアミノ酸は、陽イオン、双性イオン、陰イオンが平衡状態にあり、講義資料6や7に示すようにpHが変化するとその組成が変わる。

問3・問4

活用力 論述力

問3. ヘモグロビンの酸素解離曲線がシグモイド型をしている理由をアロステリック効果の逐次モデルで説明しなさい。ただし、イラストは使わずに文章だけで説明しなさい。その際、「講義資料23」の図にある(1)～(5)を説明に引用してもよろしい。

(配点率 20%)

問4. ボーア効果とは何かを説明しなさい。また、ボーア効果が恒常性の維持に役立っている理由を説明しなさい。ただし、イラストは使わずに文章だけで説明しなさい。

(配点率 20%)

こちらが講義レポート作成のレポートの内容です。講義を理解しているかの理解力を見る問題をここで提示しています。その次が、高校までの知識の中に講義での新しい知識を活用できるかを問う問題です。

課題・レポート作成 平成28年度 ダビンチ入試より

次の文章を読み、問1～問3に答えなさい。

中略

私は、人間の社会のコミュニケーションの役割が、社会に危機をもたらしていると思う。それは、人間のよくなるコミュニケーションを神代ないから人間は危ないと思う。人間がよくなる方向に向かっているから危ないから危ない。そのことを基にします。

私は、アフリカの動物園の中でオウサマを研究してきました。オウサマはパンパンやオウサマと似ていて人間の子供に似ています。人間の子供と似ていて人間の子供に似ています。人間の子供と似ていて人間の子供に似ています。

私は、アフリカの動物園の中でオウサマを研究してきました。オウサマはパンパンやオウサマと似ていて人間の子供に似ています。人間の子供と似ていて人間の子供に似ています。人間の子供と似ていて人間の子供に似ています。

人間は、自分自身は、自分が見えます。オウサマ人間には見えません。人間は自分自身には、自分が見えます。オウサマ人間には見えません。人間は自分自身には、自分が見えます。オウサマ人間には見えません。

人間は、自分自身は、自分が見えます。オウサマ人間には見えません。人間は自分自身には、自分が見えます。オウサマ人間には見えません。人間は自分自身には、自分が見えます。オウサマ人間には見えません。

人間は、自分自身は、自分が見えます。オウサマ人間には見えません。人間は自分自身には、自分が見えます。オウサマ人間には見えません。人間は自分自身には、自分が見えます。オウサマ人間には見えません。

人間の社会では、家族と共同体の編成は違いますが、自分自身の子供よりかみいという「えこいさ」の編成です。一方、共同体では互いに平等につきあうことを求めます。本来は編成の違う二つの編成を同時に成り立たせることが、人間の能力を高めることになりました。

私は、今、家族が崩壊し始めていると思います。人間は生物学的な同種心など、生物学的な能力に基づいたコミュニケーションを発達させてきました。にもかかわらず、今は、生物学的な能力を「人間」として、コミュニケーションの編成が崩壊しています。しかし、人間はまだそれを編成できていない。また、「自己」が崩壊される危険があります。自己責任、自己責任。自分の利益が優先されています。

一方で、人間の子供で育ててくれる編成は編成しています。子育ては人間の子供と互いにならな。そして、食事は重要なコミュニケーションだったのに、崩壊してきています。この家の崩壊は、人間の損失にもつながります。家族が崩壊すると、共同体だけが残り、自分の利益の優先を優先し、自分と他人の間に溝を築く原因になります。そのために、編成が崩壊して、物質の喪失を招くことになる可能性があります。オウサマの社会の中で、その結果として、危機的状況に陥るようになります。競争を重視すれば、利益のみを追求する共同体となり、オウサマと同じようにその危機をいった人間は、その危機にインテリジェントな対応をしない可能性があります。

果たして、それでいいのでしょうか。私は疑念、そんな不安を抱えています。

出典：山崎伸一 2014 (平成26)年11月19日毎日新聞 「毎日23 配記アフリカ・オウサマ」 240 回読後)より

<教育接続を目指した問題>
<「学び」のある問題づくり
= 科学者適性等のレディネス

2300字程度の課題文を
提示

第一次選考では、もう1つ、課題・レポート作成があります。長文を読解していただき、科学者適性を評価します。

問1
この課題文にある内容と合致するものを下記よりすべて選び、それぞれの解答欄に番号を書きなさい。
(配点率 8%)

<A群>

① ゴリラ は、人間 であるための 十分 条件である。
 ② ゴリラ は、オランウータン であるための 必要 条件である。
 ③ チンパンジー は、類人猿 であるための 十分 条件である。

抜 粋

<B群>

① ゴリラ と サル の差は、人間 と チンパンジー の差より 大きい。
 ② チンパンジー と オランウータン の差は、類人猿 と ゴリラ の差より 小さい。
 ③ サル と オランウータン の差は、チンパンジー と 類人猿 の差より 大きい。
 ④ 人間 と サル の差は、類人猿 と ゴリラ の差より 小さい。

**文意的確な理解、正確さなど、
筆者の主張と文脈をきちんと捉えられるかをみる問題**

文意的確な理解と正確性、長文かつ600字ぐらいで自分の意見を述べる小論文などを作成します。

ダビンチ入試の資質・能力の評価

最終スクーリング(課程・系別)

課題提示
→ グループワーク

課題提示
→ プレゼンテーション・ディスカッション



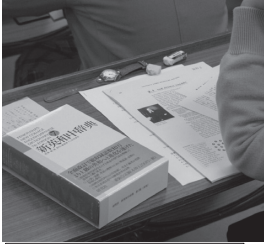
思考力・判断力・表現力等
主体性を持って協働して学ぶ態度

受験勉強に動機づけられた狭い学力による入試の課題
→ 日常の教育現場で行われている主体的学習スキル・能力を見る
初等・中等教育制度に寄与する大学入試手法を目指す

これが最終選考の様子です。最終選考は、課程ごとに異なるのですが、グループワークやプレゼンテーションに挑戦いただいています。先ほど申し上げたとおり、受験勉強に動機付けられた狭い学力による入試課題ではなくて、日常の教育現場をここでもう一度再現して、この中に受験生に入っていて学習成果があるかどうかを判定します。

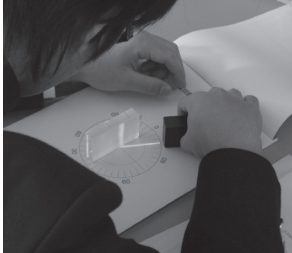
最終スクーリング 配布無し

課題提示
→ レポート作成

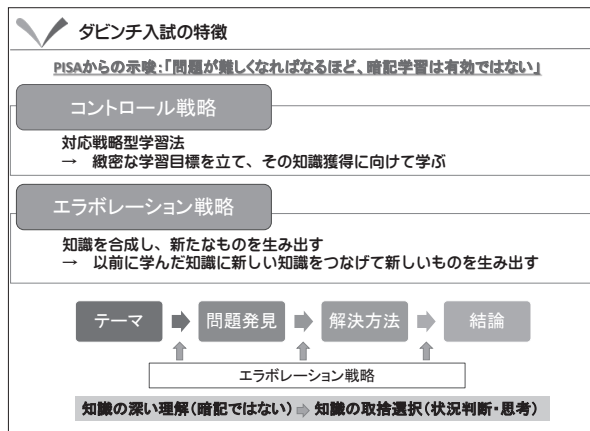


辞書や資料を見ても良い

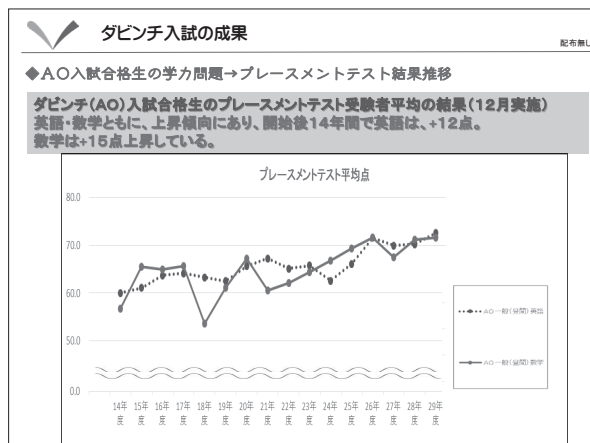
講義を受け、実験をして
その結果を考察・レポートする



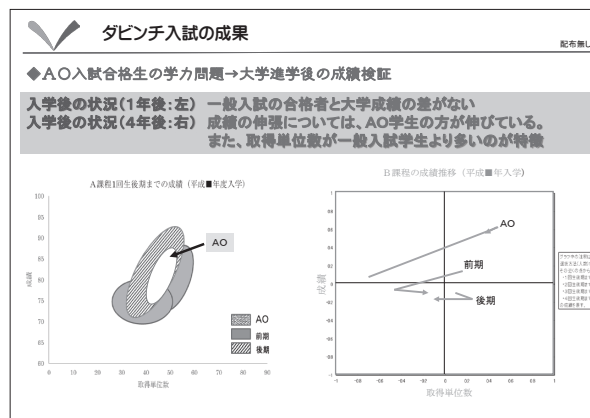
実際の大学での学習の場面を再現しているのので、英語の論文を読んでもらうときも、辞書をお渡ししています。また、実際に実験もしていただくときもあります。その場合は、実験器具をお渡ししています。このように、大学での教育場面そのものであることがお分かりいただけるかと思えます。



これらのテスト内容の背景の理論ですが、PISAからの示唆です。問題が難しくなればなるほど暗記学習は有効ではないということが、PISAの学習調査で分かってきています。PISAは、対応戦略型学習法、要は緻密な学習目的、暗記といった知識獲得に向けて学んでいくのを「コントロール戦略」と呼んでいます。そして、もう1つは、以前に学んだ知識に新しい知識をつなげる、合成して新たなものを生み出す方法を「エラボレーション戦略」と呼んでいます。このエラボレーション戦略をダビンチ入試では実践して行っているのです。



では、ダビンチ入試の成果についてお話します。ダビンチ入試は導入して10年余り経過しています。ダビンチ入試を合格してすぐ後のオリエンテーションでは、プレースメントテストをしています。英語と数学を実施していますが、その結果、合格者の得点が年々上昇しています。既に数学は15点、英語は12点、平均点が上がっています。長期に渡って実施しますと、進路指導でダビンチ入試のレベルがほぼほぼ知れてしまい、基礎学力も一定もしくは少しずつ低下すると思われるのですが、いまだに上昇を続けています。



次にAO入試の学生は、大学に入ってからからの学力はどうかを見てみましょう。左側の図は、ある課程の1回生後期までの成績です。本学は前期テストも後期テストも全部点数化します。縦軸がテストの成績、横軸が取得単位数です。

ここの、学生の成績と単位取得数をプロットし、入試類型別に分けました。そうすると、前期日程、後期日程、そしてダビンチ入試の合格者がいる範囲が分かります。ご存じのとおり、本学の場合、一般入試の前期日程より後期日程のほうが高い受験偏差値です。そして、AO入試は一般的には低いと言われています。しかし、この図にあるようにAO入試の学生は、前期日程、後

期日程の間に位置していることが分かります。課程によっては、トップ層がAO入試の学生です。

また、特徴的なのが右側の図です。どう見るかといいますと、先ほどと同様に、縦軸は成績で、横軸が単位取得数です。線の始まりから、1回生の後期、2回生の後期、3回生の後期、そして矢印の矢の部分で4回生の後期の成績状況となります。こう見ると、ダビンチ入試の学生は、高学年になれば、成績がぐぐっと上っていることがわかります。この高学年から、成績が上昇するのが、ダビンチ入試の学生の特徴になっています。さらに、左右の図からも少しおわかりいただけるかと思いますが、単位取得数が多いのもダビンチ入試の学生の特徴になっています。

ダビンチ入試の成果	
◆ダビンチAO入試合格生の特徴	
★合格直後のプレースメントテスト経年比較 開始後14年間で英語は、+12点、数学は+15点上昇している	
★→前期日程・後期日程の合格者と進学後の成績と比較して、 ①入試類別の優劣なし ②ダビンチ入試合格者の方が単位取得数が多く、中途退学予備軍の発生率が約半分 ③一部の課程は、単位取得だけでなく、成績も常に高い	
★1年後期の成績によるドロップアウト予備軍対象者 ダビンチ(AO)入試合格生:2.2% 一般入試合格生:4.8% ダビンチ(AO)入試合格者のほうが少ない	
★ダビンチ入試合格者の学習行動特性 自立的学習姿勢ができています 調査研究に関わる手法(協同的問題解決・表現技法・プレゼンテーション)の経験値が高い	
★ダビンチ入試合格者の学習観・進路観 高学歴・お金もうけ・一流になりたいという項目へのこだわりが低い 社会貢献をする意欲が高い 自己肯定・積極性といった主体的な態度と周囲との協調性に対する自己認識が高い すでに将来ビジョンを達成するために行動を起しているものが多い	

他にも、特徴があります。★3つ目ですが、ダビンチ入試の学生のドロップアウト予備軍の発生率が一般入試の学生の半分です。

これらの背景を、★の4つ目、5つ目で語っているのですが、ダビンチ入試の学生は、一般入試の学生と比べて、学習行動特性や学習館などが異なります。まず、ダビンチ入試の学生は自律的学習姿勢ができています。特に調査研究に関わる手法の経験知が、一般入試の子たちよりも非常に高いということもわかっています。

さらに、高学歴とかお金儲け、一流になりたいという志向が弱く、社会貢献の意欲が高いです。それから、自己肯定、積極性、主体的な態度、周囲との協調性といった自己認識も高い。将来ビジョンを達成するための行動を起している者が多いですし、楽な単位が取れる講義を受講するより、自分のためになる講義を受講したいという回答も一般入試の学生よりも多いです。これが、単位取得数の多さに反映されています。

ダビンチ入試の成果 配布無し

◆**ダビンチ入試を受けた感想→大学を目指そうという意欲がわく教育的入試**

ダビンチ入試を受験生はどのように受け止めているか (合格者アンケートより)
 →「ダビンチ入試合格者アンケート」よりダビンチ入試はどのような入試だったか?の回答
 ①通常の一般入試との違い ②向学心の醸成 ③受験で成長

不合格者たちは…?
 Ans. **「大学進学意欲が増した」**
 ・ダビンチ入試での経験からこの大学に進学したいと強く思えるようになった
 ・試験を受けてみて、将来と大学での学びが繋がって必ずこの大学に合格したいと思った
 ・AOの準備を通して自分をじっくり見つめることができたのも一般入試を乗り越える原動力になった

◆**ダビンチ入試受験者の一般入試再受験率**

第1次選考不合格者の一般入試再受験率	40%
最終選考不合格者の一般入試受験率	42%

あと、ダビンチ入試を受けた感想も聞いています。ダビンチ入試はどのような入試だと思いましたがと聞いたところ、「一般入試と違う」「向学心が醸成できた」「受験で成長した」という回答を毎年いただいています。

合格者だからいいことを言ってくれるといえばそれまでですが、では、不合格者にも聞いてみようと言うことで、聞いてみました。そうすると、「大学進学意欲が増した」と言ってくれています。「ダビンチ入試での経験から、この大学に進学したいと強く思えるようになった」「試験を受けてみて、将来と大学での学びが繋がって、必ずこの大学に合格したいと思った」「AOの準備を通して自分をじっくり見詰めることができたのも、一般入試を乗り越える原動力になった」と具体的には答えてくれました。

では、この不合格者たちがどれぐらい一般入試で再受験してくれているのかがこちらです。第一次選考不合格者の一般入試再受験率は平均で40%。これは他の大学はあまり出さないのてよくはわかっていないのですが、おそらく高いのではないかなと思っています。そして、最終選考不合格の場合だと、再受験率が42%です。年度によっては50%以上という状況もあります。

これは本学だけに限らないようです。最近お伺いしたのが、お茶の水女子大学のフンボルト入試です。フンボルト入試に変えてから、お茶の水女子大学も再受験率が高くなったとおっしゃっています。こういう入試だと、高校生は、大学進学後の学習をより一層イメージできて、彼らの進学意欲につながっているのかなと思います。

ダビンチ入試の成果

スクーリングで印象に残ったこと

・大学生になれば、このような形で授業を受けるのかと、**大学生になった気分**で先生の話を耳を傾けていました。
 ・まだ知らなかった事を教えられ、それに関する資料を渡されて問題を解くとき、**試験中ずっとワクワクして楽しかった**ことが印象に残っています。
 ・講義の内容も高校では習わないもので、**もっと聞いていたい**と思いました。
 ・**高校で学習してきたことを確認するとともに、大学で習うような内容で、思考力や理解力が問われている**のが感じられた。また、**実際に入学したように感じられ、楽しく感じました**。講義で**大学の授業の雰囲気を一足早く体感**できたことはいい経験だったと思う。
 ・**実際に講義を受けて課題に挑むというスタイルが、印象深い**です。合格してもいないのに講義を聞ける事が、とても嬉しかったです。
 ・**大学の講義がどれも興味深く、試験であるという緊張感が和らいだ**ことです。高校などの授業より長い時間の講義であったのにも関わらず、すぐ時間が経ったように感じ、**もっと詳しく知りたいと思った**ほどでした。

次に、ダビンチ入試の選考、スクーリングという別名があるのですが、そのスクーリングで印象に残ったことを聞きました。「大学生になればこのような形に授業を受ける、大学生になった気分」「試験中ずっとわくわくして楽しかった」「もっと聞いていたい」「高校で学習してきたことを確認すると同時に、大学で習うような内容で思考力や理解力が問われている感じ」「実際に入学したような感じで楽しく感じた」「大学の授業の雰囲気を一足早く体験できた」「実際に講義を受けて課題に挑むというスタイルが印象深い」「試験であるという緊張が和らいだ」。そういった感想を毎年回答してくれます。

ダビンチ入試における教育接続の視点

「接続」を同じ「育てる」という言葉で表現しているが……

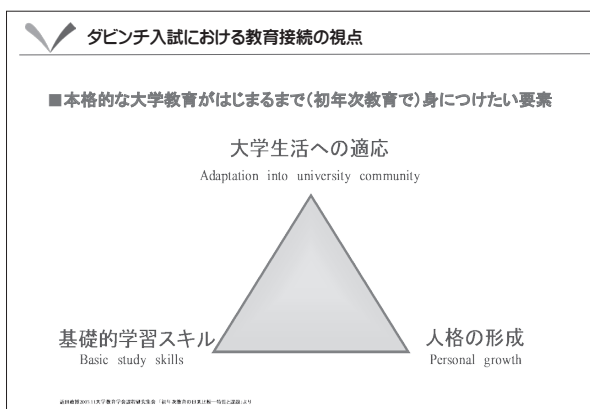
ダビンチ入試が目指すのは、
「選抜」入試から、「教育」入試への 変貌

入試も「教育」であるべき。

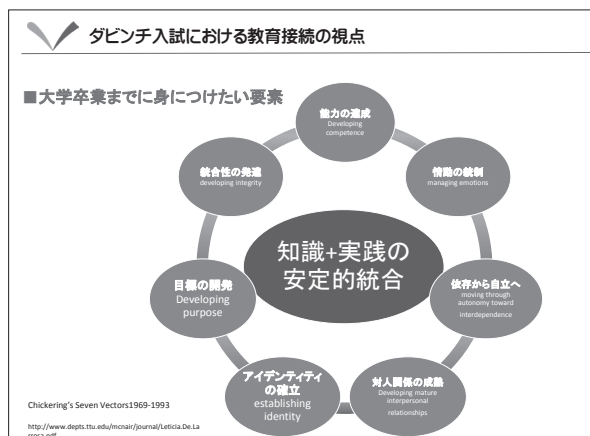
これまでのような「大学合格」の手段としての試験に動機づけられた勉強からの脱却を狙う。

ダビンチ入試は、高校3年生の2学期に入ってから入試を受けていただきます。しかし、ここでもし不合格になってしまいますと、かなり傷つくと思うのです。おそらく意欲もなくしてしまうかもしれない。そうならないように、大学での学業を具体的なイメージをしてもらって、大学に入るとこんな面白そうな学びがあるんだ、という感激を持ってもらいたい。そして、もし駄目だった場合も、合格できるようにさらに勉学を頑張ろうと思ってもらいたいということも、テストの中のメッセージとして入れて入試を設計しています。

それを受けて、ダビンチ入試は、選抜入試から教育入試へと変貌させていきたい。入試も教育であるべきではないかと考えています。さらに、大学合格の手段としての試験に動機付けられた勉強からの脱却も、同時に狙っていきたいと思います。



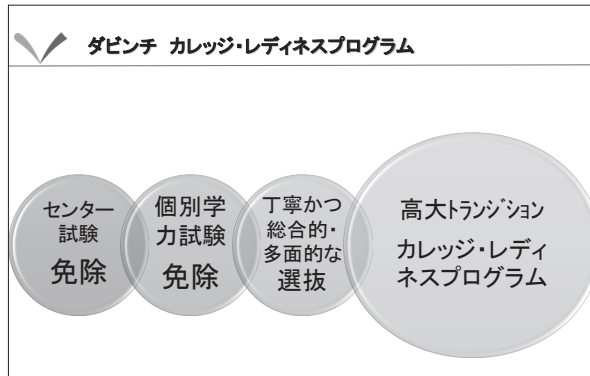
その背景です。これは名古屋大学に近田先生がいらっしたとき（現神戸大学）の初年次教育の分類ですが、大学教育が始まるまでに身に付けたい要素として、大学生活への適応、基礎的学習スキル、人格の形成を挙げています。



また同時に、こちらは大学生が卒業までに身に付けたい要素、ChickeringのSeven Vectorsの理論ですが、知識・実践の安定的統合を目指し、その周りの具体的な項目が並んでいます。これはm、大学卒業までに身につけたい要素ですので、これを逆算して、大学入学時だと先ほどの三角の図と結び付けたところに大学進学レディネスがあるのではないかと考えています。

ダビンチ入試における教育接続の視点	
■高校から大学へのスムーズな移行	
高校生の接続教育	大学生の初年次教育
<ul style="list-style-type: none"> ☆高校と大学での学びの違いを認識させ、 ☆自立した学習者への変身を促し、 ☆学生のアカデミック志向を満足させ、 ☆スムーズな大学移行ができる 	<ul style="list-style-type: none"> ☆中退率を下げ ☆大学の帰属意識を生み、 ☆学生のアカデミック志向を満足させ、 ☆教育効果を高める
<ol style="list-style-type: none"> 1. 高校と大学の学びの違いを伝える 2. 継続的な学習スタイルが確立するよう支援する 3. 大学時代の学習目標を持たせる 4. 大学生活に希望を持たせる 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 大学のミッション、教育目標を伝える 2. 自分の大学に誇りを持たせる 3. 大学時代の学習目標を持たせる 4. 自分の人生に希望を持たせる
<ul style="list-style-type: none"> ・何をやりたいかわからない新入生が多い ・受身の姿勢の新入生が多い ・自己コントロールができず、学習を放棄する新入生が少なくない など 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教育を受ける目的がない学生が多い ・最初の1年でやる気をなくす学生が多い ・こなはずじゃなかったと悩んでいる学生が少なくない など

そのレディネスの内容を示します。高校生の接続教育、初年次教育の目標を合わせてゴールとして、大学進学までの期間にダビンチのもう一つのプログラムを設計しています。それが高次トランジションのためのカレッジ・レディネスプログラムというものです。



先輩学生や仲間と一緒に学ぶ。

GOAL
生徒から学生への意識変革を目指す！

開設当初の入学前教育の目的

1. 入学前の学習の継続を図ると共に大学教育に結びつける。
2. 入学後意欲的に学習に取り組むことができるよう学習指導、動機付け、激励などを行う。
3. 高校との連携を図り、高校の学習指導を側面支援する。

以前は、生徒から学生への意識変革を目指すというゴール設定でしたが、今はゴールを明確にし、内容も再構築して新しいことにも挑戦をしています。

ダビンチ カレッジ・レディネスプログラム

<p>オリエンテーション</p> <p>入学までの過ごし方</p> <p>プレースメントテスト</p>	<p>科目強化学習</p> <p>添削課題</p> <p>学習相談・体験会</p>	<p>トランジション教育</p> <p>先取り講義</p> <p>ジェネリックスキル開発&グローバル</p>
-----------------------------------------------------	-------------------------------------------	------------------------------------------------------------

GOAL: 「高校生が大学生になる」

理工学基礎講座

個別対応の学習支援

数学の講師による特別個別指導

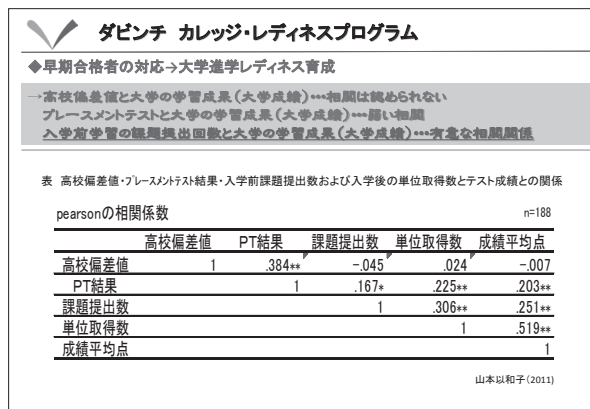
グループワーク実践

国際交流会

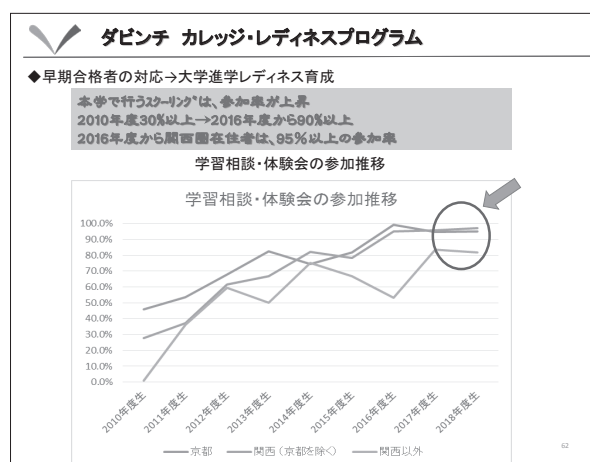
ダビンチ カレッジ・レディネスプログラム、学内では頭文字を取ってCRプログラムと言って

いますが、1つはオリエンテーション、入学までの過ごし方、プレースメントテスト、二つ目が科目強化学習。これがいわゆるリメディアル教育の一種です。

本学のダビンチ入試は11月に合格発表です。まだ高校生の途中ですし、入学まで4カ月もあります。ここを放置しておく、本当に4月に入ってから大学教育のペースに付いてこれられません。学習習慣は常に保持すること、基礎固めを徹底すること、大学教育の基礎を経験すること、さらに大学生としてのマインドもセットできるよう、プログラムを構成しています。

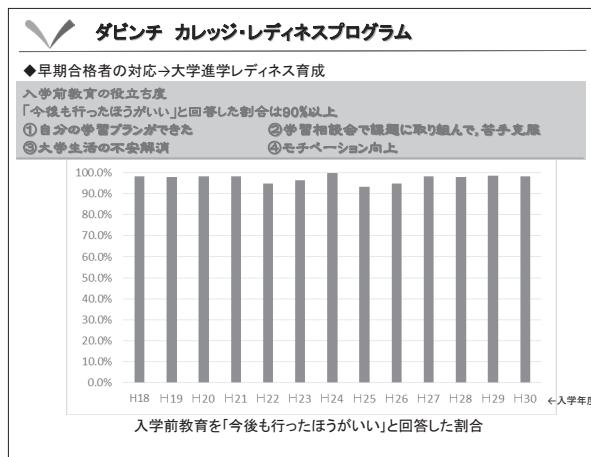
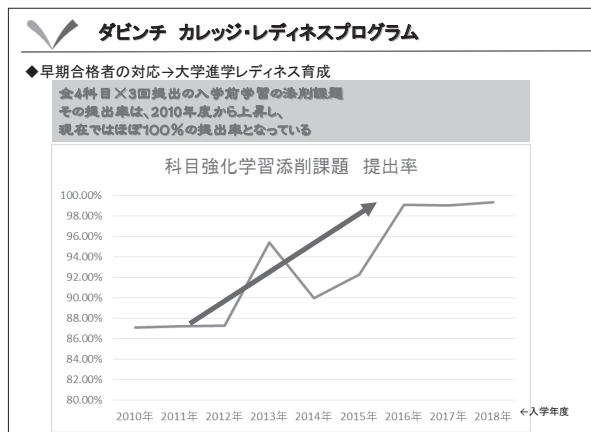


では、合格後のこの期間になぜ力を入れてプログラムを展開しているのか。その理由は、2011年に論文で発表したのですが、大学入学後の単位取得数とテスト成績に、なにが影響しているかを見てみました。この結果から、高校の偏差値とプレースメントテストの得点、入学前教育での課題提出数を見ると、面白いことに、入学前教育での課題提出数、つまり継続的な学習姿勢と言えるのですが、それが入学後の成績に関係していることがわかりました。面白いことに、高校の偏差値（どこの高校出身か）はあまり関係がなかったのです。



その結果から、入学前教育にはかなり力を入れるようになりました。今では、参加推移が上昇

しています。合格者は、全国に広がっているのですが、北は北海道から南は沖縄まで、入学前教育のスクーリングに参加してくださっています。



こちらは、科目強化学習の添削課題の提出率の推移です。これも先ほどの結果が出てからかなり強くアナウンスしているからか、課題の提出率が上昇しています。

次に、カレッジ・レディネスプログラム（CRプログラム）の役立ち度ですが、「自分の学習プランができた」「学習相談会で課題に取り組み、苦手分野の克服ができた」「学生生活の不安が解消した」「同じ合格差や先輩学生と活動し、大学進学モチベーションが向上した」という感想を寄せて来ています。また、今後もCRプログラムを続けるべき意見も多い結果になっています。

ダビンチ入試 + カレッジレディネス育成活動

ダビンチプログラム

多様な形式の入試で才能を発見	積極的なカレッジ・レディネス育成活動
<ul style="list-style-type: none"> ・より分野に則った選抜方法 ・より多面的な入試 ・判定要素のさらなる検討 ・高校教育を基とした大学教育とのレバランスを意識した問題 （教育接続を意識した問題作成） <p>ダビンチ入試（一般選抜） ダビンチ入試（地域創生Tech Program・地域） ダビンチ入試（地域創生Tech Program・一般） ダビンチ入試（グローバル選抜） などなど・・・</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・対話的な学びから深い主体的な学びへの姿勢確立 ・基礎的な学習スキルの醸成 ・学習観・人格の形成 ・社会性・国際性・実用性等の視野の拡大に伴う「学び」の価値観の創出 <p>大学先取り「理工学基礎」講座設置 通信添削による入学前学習（リメディアル） グローバル化。英語力アップコース PBL グループワーク講座 インターンシップコース</p>

高大接続ではなく、 高大移行（トランジション）を達成するための入試改革

ダビンチ入試とカレッジ・レディネスプログラムでダビンチプログラムと総称しています。その狙いと具体的項目をここに挙げています。これは高大接続ではなくて、高大移行を達成するための入試改革をダビンチプログラムでは目指しています。

ダビンチ入試の進化

◆現在のダビンチ入試+ダビンチカレッジレディネスプログラムのポジション

ダビンチ入試の成果

1. 合格者の学力水準が年々上昇している。
2. 入学後の学習パフォーマンスに成果が認められる。
3. 入学前教育では、学習姿勢と学習意欲の維持が図られている。
4. 「教育的入試」機能を持っている。
5. 入学後の学習生活のイメージ醸成が図られている。

これからのダビンチプログラム 「才能を発見し、育てる入試」

1. これまでの学習体験とこれからの学習プランのストーリーをつなぐことで、主体性が生まれる入試
2. 能力や才能を多面的に注目し、成長潜在力を発見する入試
3. これまで培ってきた知識と能力の融合を図り、さらに現実社会の解決と未来社会の構築の面白さを実感させる入試と接続教育
4. それらを通して、テックリーダーになるための構えが育まれる入試と接続教育

では、ダビンチ入試+ダビンチCRプログラムは、概念構造に照らし合わせるとどの位置かと考えたとき、われわれは、既に「ふるう」「つなぐ」「変える」の「変える」のはじめ程度のところまでは行っているのではないかと考えています。

最後にダビンチプログラムのコンセプトです。「才能を発見し育てる入試」という形でダビンチをやっています。受験生に主体性が生まれて、評価者は成長潜在力を発見して、これまで培ってきた知識と能力の融合を図り、さらに現実社会の解決と未来社会の構築の面白さを実感してもらうような入試作問と接続教育の設計をし、それらを通して、テックリーダーになるための構えが生まれるような入試と接続教育をコンセプトにしてダビンチプログラムをアドミッションセンターが中心となって企画しています。

ご清聴ありがとうございました。

ご清聴ありがとうございました。



K Y O T O
I N S T I T U T E O F
T E C H N O L O G Y

ご質問、お問い合わせ : ewhay@kit.ac.jp

関係詳細は、大学入試研究ジャーナル No28
「ダビンチプログラムの高大トランジション面における検証 ー入試と入学前教育の機能設計に着目してー」